



ミレナ・ミロサヴリエヴィッチ日本初個展である。中型の作品を7点、小型の作品を4点、立体を1点展示した。ミレナは1986年生まれの27歳である。若手の作家でありながらも、確信に充ち、大きな自信と野心を携えている。

ミレナのコンセプトは「変容」にあると私は解釈する。絵画の場合、鉄板に酸で描き、その上にインク、炭の乗せ結晶化させる。するとそれまでの素材と全く異なるマチエールが生まれ、物質が変容する。

それは立体の場合も当て嵌まる。木を焼いて炭化させる。この単純な作業は魔術的要素を孕んでいようと、作品制作の明確な意図を持たば、単なる「加工」の粋を脱する。変容した素材は、小品においても使用された。

G・バタイユは「食べることと調理することの間には不均衡」があり、不均衡という「切断が人間と動物を区別している」とする。「動物は媒介なしに食べる」、つまり延期しない。人間は「準備」をする(『非=知』)。

バタイユは芸術が労働の成立の遙か以後に生まれたことも『ラスコーの壁画』で論じている。魔術も人間が生み出した定義である。すると「変容」「加工」「準備」は人間「である」根底に届いていると言うことが出来る。

現代美術は、人間が発生する現場に立ち会う。

ミレナが「変容」において描くのは自己の服であったり生活必需品の椅子であったりする。日用品がモチーフではなく芸術として変容する姿を目撃することによって、我々は日常を見直し再考察する機運が開示されるのだ。

それにも関わらずミレナは主観を抹殺し、客観的に物事を見詰めた上で、作品を制作している。だからこそパフォーマンスが可能となる。ミレナは今回、パフォーマンスの写真を持ってきた。

炭化した作品に自己を埋没させ、自らも変容させる。メソッドもテクニックも過多なコンセプトチュアルも必要がない、簡素なパフォーマンス本来の姿を行っていることが想定できる。日本でもやって欲しい。

炭になるのは死を予感させるが、死もまた人間の変容であり、そこに神秘性や宗教性を強調する必要が日常でも必要はない。ただ、人間が生きることに本来の役割が、芸術そのものであることをミレナは気づかせてくれるのだ。

現代美術は権威を排除しているのだから、作品の背後に権力者は存在せず、剥きだしの己のみが存在する。ミレナの作品の背後にはミレナしかいない。その個人が強靭であり開かれているからこそ、見る者は共感する。

現代美術とはそこまで、単純で根本的な役割を果たす。

